# 浅見克彦・山本ひろ子 編
# 『島の想像力 —— 神話・民俗・社会』

岩田書院／A5判並製163頁／2010年7月発行／
ISBN978-4-87294-639-0／1,900円（税抜）

**塩崎文雄** 所員／表現学部教授

浅見克彦・山本ひろ子両氏の編になる『島の想像力』の紹介をするにあたって、私事から始めるのはいささか面はゆいものがあるのだが、そこからしか始められないほどの強い知的刺激と学問的機縁とを感じているのだから、仕方がない。

それというのも、筆者もまた、本誌に「江戸の地霊・東京の地縁」なる小論を寄稿している。取り扱っているのは東京市京橋区本湊町（現：中央区湊一丁目）という街である。隅田川河口ちかくのこの街は、名の示すごとく、近世期を通じて「江戸湊」の拠点のひとつであった。紀州から、そして伊豆諸島や八丈島などから薪炭や金肥（干鰯・〆粕）、八丈島織、石材をはじめとするさまざまな物資が運び込まれた土地がらであった。ところが、明治以降、本湊町は〈水からの回路／水への回路〉を急速に喪失し、単なる川っぷちの街へと零落してゆくのである。

『島の想像力』が共同研究プロジェクト「島のコスモロジーと想像力」を母胎に産み出されたことや、当該プロジェクトが八丈島や青ヶ島、さらには沖縄や隠岐・対馬などに精力的なフィールドワーク作業を展開していることは、かねてから聞き及んでいた。だから、あわよくば筆者の目下の関心事である「本湊町」を外側からあらためて捉え直すきっかけを掴むことができるかも知れない。そうした下心から、本書をちょっと垣のぞきしてみたのである。

案の定、上野俊哉氏の「群島のヘテロトピア」は吉本隆明（おそらくは、きだみのるも背後にはいる）の生い育った、本湊町の対岸月島から説き起されている。山本ひろ子氏の「孤島の姫神考」は、漂流民たちの凄惨なサバイバルを描き、「鳥も通わぬ」と歌われ、近世期を通じて八丈島織を幕府に貢納した八丈島や青ヶ島の孤絶性から開始されている。それとは別に、小山和行氏の「琉球王権儀礼と久高島」は、麦の「穀霊」を身に浴びる祭祀を克明に再現してみせてくれる。浅見克彦氏の「島の穿孔と境域のコスモロジー」もまた、久高島の文化世界に対

抗する異質な他界「リューグー」のもつ両義性を招き入れる一方で、島の洞窟のもつ機能にたちどまることで、内と外との両面から世界観なるものを根源的に編み直し、刷新しようと図っている。

物見高い一読者である筆者としては、これらの地に構築されたミクロ・コスモス観と、それらと江戸湊を繋ぐ、かぼそいけれども絶えることのない〈水からの回路／水への回路〉を見いだせれば「能事畢ンヌ」というのが、あらかじめの想定値だったのである。

ところが、である。本書は驚嘆して天を仰ぐべき論集であった。筆者の小賢しい魂胆を足蹴にし、意識を身体ぐるみ反転させるばかりか、思いもよらない遠い場所へ否応なく連れ出してしまうといった体の書物だったのである。

上野論は吉本隆明の「原風景」としての月島から説き起しながら、その背後に貫くハイ・イメージのかなたに、アムステルダムの「群島性」を参照しつつ、トカラ列島の日蝕をめぐる運動を重ね、見損ねた太陽のコロナに「島と都会、トカラと奄美、沖縄、本土の間の出会いそこねのなかにこそ、ある想像力、異質なものをつなぐ試みが新たな環を紡ぐ」（傍点筆者）とする。その一方で、それらをすばやく「同時に日常の営みからは周縁化され、排除され、不可視化されるような」フーコーのいわゆる「ヘテロトピア」に接続／転轍してみせる。不逞なまでのコスモロジー観の提示がここにはある。

山本論は絶海の孤島の浜辺に打ち寄せられる「寄り物」のひとつに「姫神」を定位する。その上で、「火の神の祭文」の解読を通して、備後の荒神神楽、宮崎県の椎葉神楽、奥三河の花祭祭文などとの異同を読み解きながら、「血不浄への忌避と血への親和という背反の斥力」が、それらの地域に姥たちを流竄させる一方で、逆に彼女たち自身が軽々と「孤島性」を越境し、「巡歴」「還流」しながら「勇猛なる異能の姥集団」へと化現してゆくさまを幻出してみせる。「翁の発生」ならぬ「姥の発生」の言挙げがここにはある。付け加えるまでもないことだが、「女の家」における「女たちの紐帯、また身体性とメンタリティ」を、現世的秩序を倒立させるもうひとつの女のいとなみとして、山本氏は提示してみせてくれているのであった。

上野・山本両氏のダイナミックな「躍動」（誤解をおそれずにいえば、既成の学問秩序に対する「攪拌」「騒擾」）に比して、小山和行氏の「琉球王権儀礼と久高島」は、麦の初穂儀礼の実直、丹念な実証分析を展開している。近年（80年代以降）に実修された祭祀に、オモロの詞章の丁寧な吟味を重ね合わせ、現行の麦の初穂儀礼「ソージマッティ」「マブッチマッティ」を透かし見ることによって、かつては国王みずからが行幸し、親宰したはずの麦の「穀霊」を身に浴びる「ミシキョマ」の始終を描き出す。その上で、国王の身体性を介して、倒叙的に紡がれたであろう国土創造・穀物起源の神話をあぶり出してみせる。コスモロジー生成の

機微についての、委曲をつくした考察がここにはある。

浅見克彦氏の「島の穿孔と境域のコスモロジー」は、久高島をはじめとする沖縄の文化世界に対抗する、異質な他界「リューグー」のもつ両義性に刮目するところから開始されている。ただ、ここにいう「リューグー」によって指し示される文化世界は、エリアーデ流の完結し、聖別されたコスモスとして定立されているわけではない。そうではなくて、島の内部に穿たれた洞窟（浅見氏はそれを「穿孔」と呼ぶ）の存在もまた、統一的なコスモスをその内側から突き崩すものとして、あるいは他界への入り口／出口として顕現することで、これまた「リューグー」に通うものとされる。その結果として、むしろ「海の深淵と人の生きる世界（中略）といった境域に立ち会うごとに、それぞれの対面に応じた」「分散的で断片的であらざるをえない文化世界」が、その都度に立ち現れるとするのである。生きられる場において、意味構成が不断に失効され、刷新されるといったこうした問題意識を介在させることで、コスモロジーの意味の境域をあらためて問おうとしたものであった。

以上、擦過的に四者の立論のオリジナリティとダイナミックスを紹介してきたが、本書の真骨頂は、それぞれの論の斬新さにあるばかりではない。ともすれば天空にまでスプロールしかねない上野論、民俗の暗闇で転生を図る巫女たちの口寄せにも似通った山本論に拮抗して、島の祭祀に濃やかに寄り添う小山論、コスモロジー成立の論理的布置をその外部と内部の双方から戦略的に意味づけようとする浅見氏の論は、本書を「島という現場」にしっかりと繋留している。ここには、前二編の「騒擾」に対する「鎮撫」がある。逆に、後の二編がともすれば陥りがちの小成やリゴリズムに向けて仕掛けられた挑発と攪拌とが、前二編にはある。要するに、四人の論者が知力を尽し、学識を傾けて角逐しあった成果として、本書は世に送り出されているのである。

「対談集」や「鼎談集」なるものを筆者は好まない。その平板さや冗漫さに耐えられないからである。もとより『島の想像力』は、そのたぐいのものではない。むしろ、おのがじしものした各論の向こう側に、そうした手に汗握る座談の場、白熱した饗宴の光景をまざまざと思い浮かばせる書ではあった。

海山の馳走の備わったこうした饗宴の場に、遅ればせに参入するとしたならば、筆者は何を手土産としたらよいのか。日本近・現代文学の研究に携わってきた身としては、井伏鱒二を召喚することの妥当なるべきを思う。

井伏鱒二に、『ジョン万次郎』や『漂民宇三郎』などの漂流記ものがあることはよく知られている。ジョン万次郎らの孤島でのサバイバル生活が、山本氏の「寄り物」論と深く関わるからである。そればかりではない。井伏は早く隠岐の島へも関心を寄せ、足跡を印している。あるいは、近藤富蔵の『八丈実記』を下敷きにした『青ヶ島大概記』があり、三宅島の噴火を扱った『御神火』もあった。

それらとは別に、甲州笛吹川流域の洪水を描いた作品もあった。

これらの作品に共通して見られるのは、人間のいとなみを根こぎにする天災や人災（その極北に『黒い雨』はある）への一貫した関心が保たれつづけているという事実である。さらには、井伏固有の悠長な語り口の向こう側に隠された、空無としての「荒蕪地」へのやみがたい心の傾きがそこにあるということである。こうした関心が、主として昭和戦前・戦中期の文学的営為であったことに顧慮するとき、井伏の存念がどこらへんにあったのかを考えさせられる。しかし、それとともに／それ以上に、こうした「荒蕪地」の概念を嵌入するとき、コスモロジーは状況の関数とのかかわりのなかで、いかに変容するのか。とりわけ浅見氏に問いかけてみたい欲望に駆られている。

［しおざき　ふみお］